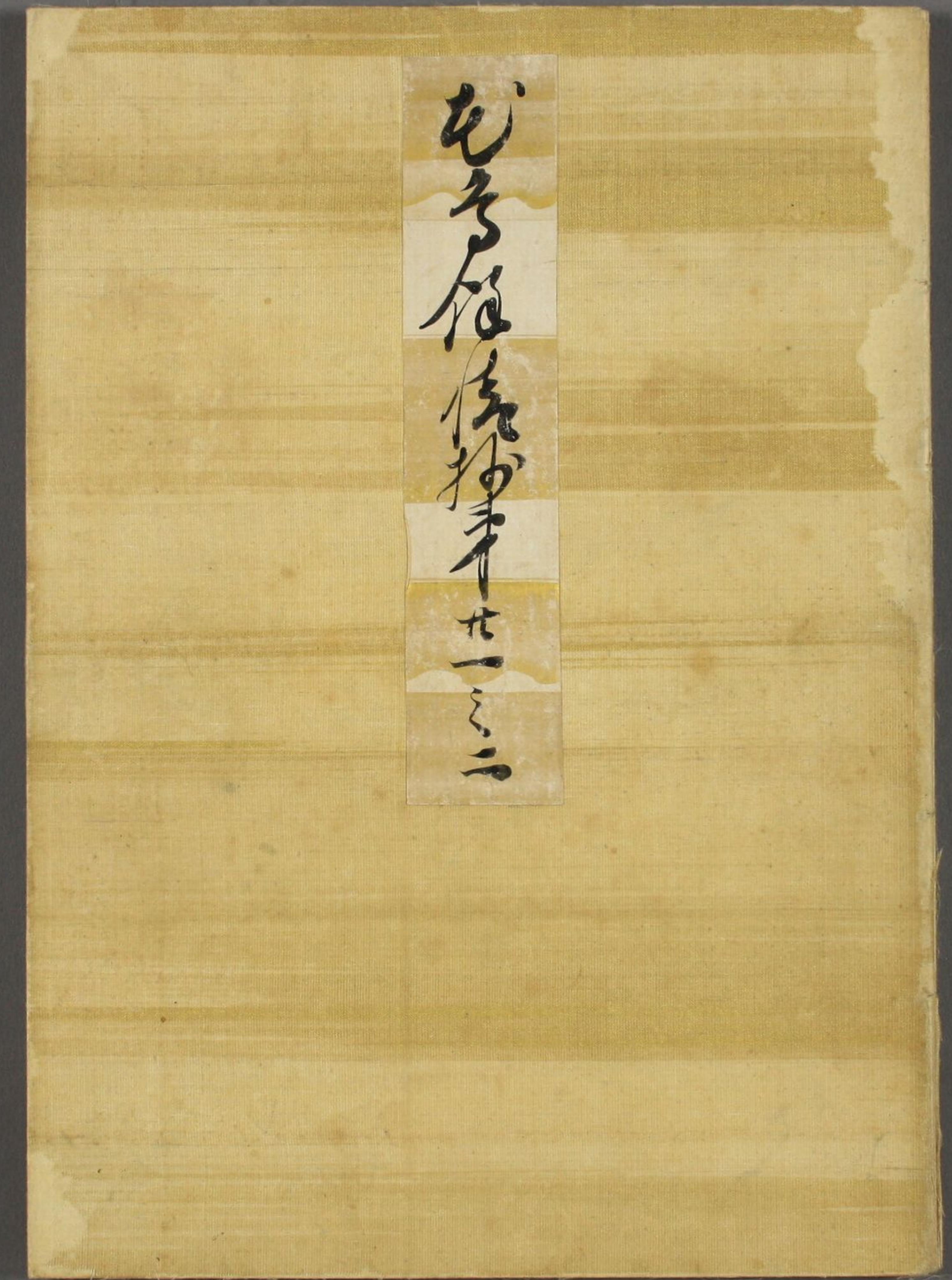
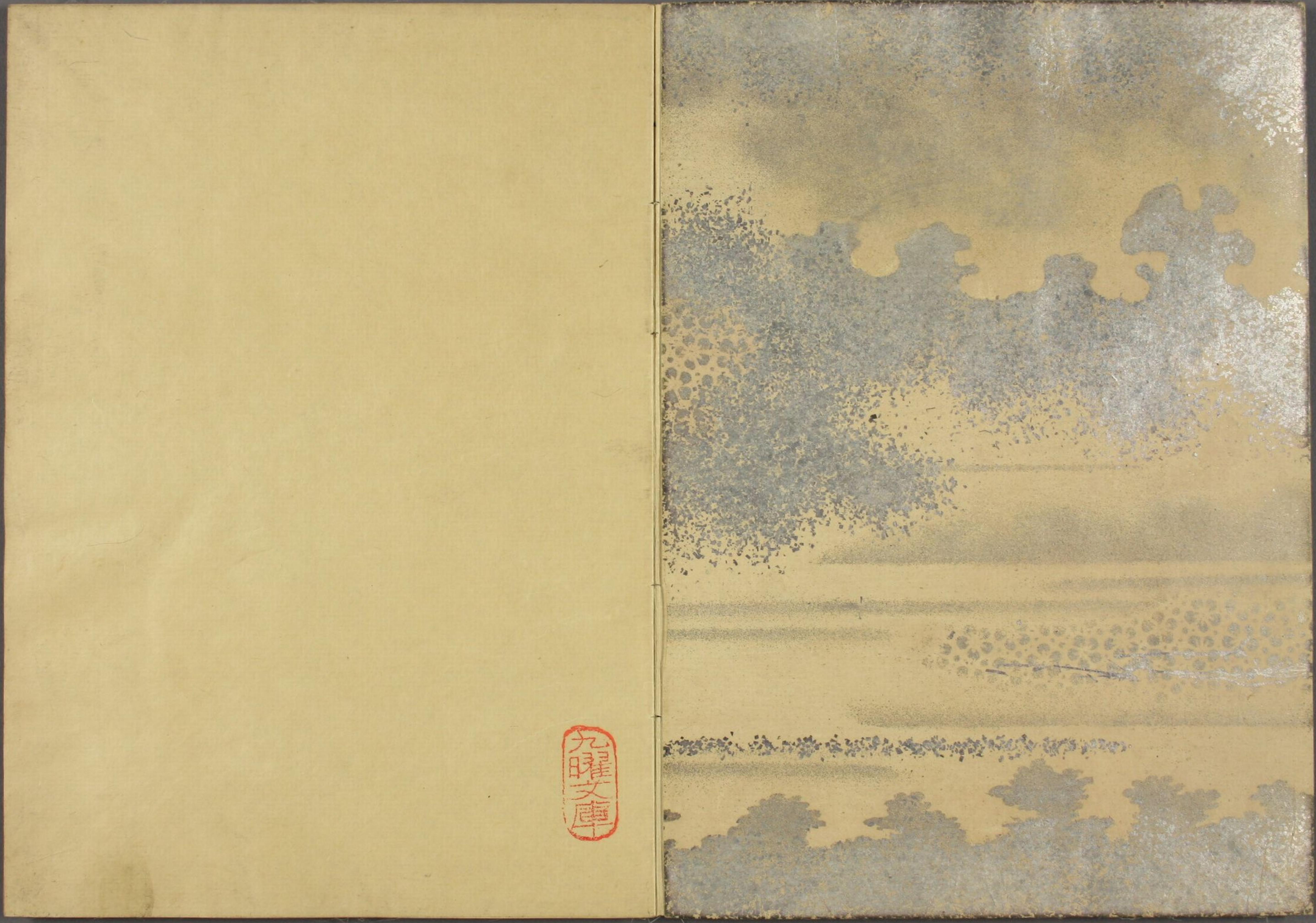


毛詩傳



6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100





九曜文庫

花鳥餘情第廿一

柏木

横笛

鈴虫

廿一 柏木

以詞并歌爲卷名源氏四十八歲の春  
秋もくの年をありとて、り誕生

而作

いとくよろのうと小

まひうの女三よりひくとく  
計きとまことわらうやとくとくせられ  
よもよま

あけのあくとまくまく人あうんとととと

女三のまつまつまつまつ

もうとふといあらん

源氏のまわらうと思ひ落つんじよ

わせも京すわせのうりあ

女三宮のゆ視

ゆくのよたつきいとけむは

ゆくのよそむかわゆき

世継や経ヨツキ時平ヒヘイ公三男コウサンメイ敦忠タクチ中納ウラナ

十二神

行ヨウひけヒケ時藥師ヤクシ經ヨウよよまゆヨウマユゆる可ヨウルカ

十二神のうちくらうちゆとくはまえ、

てよもぐりとくしとよもとくとくせ

のよもよもゆく病の人につけま

ゆくの

右大年ノハラノ君

紅梅コウバの右大年ノハラ此卷ノハラ右大年ノハラよあわた

又くらう御ノハラきくらうしまノハラとくもとくやと

まくこにそのゆくもとく

ゆくにあそゆと風ノハラまの

ゆくにあそゆと風ノハラまの

冷泉院の御文

うへ御下の心もとて承り候事す  
ありまじれ

女三えの事よ

かく心のこもとまことにいふ事す  
そひよにあ

或段云歎仕内モニ、情情モニコウ、近事モニ、  
准アツト一の書ともやけりのちお門傳  
ハ敷板アツボのりぬゆく所アツボよりく  
せぬる事アツボすまの御み物アツボ

右大臣ヒギヤク廉美ギヨウ昇進セウジンより廉美ヒギヤク  
公コノロコヤクの辯少アブシヤウわ大半タヒヤウと極アツシより  
世ヨツ純シキの川カワのこす敷板アツボサ將シヤウのう  
給アツシととて馬アツボよりうちれ

也モニ清松公

まこと有アリ御事路アリ承アリてまことに  
御アリゆきあせアリりううゆうを併アリく  
とあやくとあいあくとあく川アツボくれも  
とあく

首タヌミの事アリととて喫食アリ面アリ

よひくいもとみえどもとこもじゆみ  
えく下河をくわむ人未ニモ  
てあくうきとる事れどくふも  
とくあらきとみえどもやかくす  
まのなれどもやつなるとわらす  
ひつまきらうぶねくとくまく

スルル

まうううううううううううう

なううう

おじえとくとくとくとくとく

けううう御英あうううううう  
平とくとくとく

おおつ鷹と二えとの御中打と面  
ノ吉みくとまうきい山ニ  
えの山車かと山のつんわ列  
きつわくとまうきせはま  
しりけりきくと御島はあま

とく

今

わくうとこまうだよとくとく

れよりを馬背の事とちのゝを

経て

あもせうとろとちひとわづかわ  
ゆの

馬背の事わざいやよみ  
せるの事とあがけにほとれ  
わくさうとまうじしけよみ

ゆの

あもせうとろとちひとわづかわ  
ゆの

馬背の事わざいやよみ

せるの事とあがけにほとれ  
わくさうとまうじしけよみ

かくそくとすりつ半身  
うへくとそくとあがけにほ  
と道心をうやうてひるひ  
わとよしをうやあきやあらとそ  
あくまくうりあうとすくも  
うひうへくのいゆひやうあは  
かとこくとまとタまうわま  
つむ

とあもせうとろとちひとわづかわ  
ゆの

おまかうりあきの御ハモリとお出門等す

たよるや

おまえとさくしめりんのりくみせん

タミのつりたれよ車

おまえすうり合をううてみゆきへま

ひともゆくとおまゆりやり

みちくらひむすびいじうてふとう

とくうりえまうやくわみすう

えゆくまうひせうよまくとく

とくき車トクキあはまきえこりま

まわとひくわやくそ

のむくはくめの車トクキ

院の仰奉とおねりア源氏の

事ヨシ

右ね軍ヨウジンのよもヨモてあり候

お門等ヨウモンドウと唐名カラナと金吾將軍キンゴと右

ね軍ヨウジンとよし相遠サザニらむ

しゆくときとひまわゆく

しゆくときとひまわゆく

サニ 横笛ヨコブエ

ハ秋も暮る河より毛とつりあ川  
源氏三十ヵ葉けやうの二歳

脚もくすまともやうかとどうも

そつ二月水門萬年去今年一月忌や  
六條院勝道行ミモニキヤウ  
かきくらげの浦カキクラゲのうも  
うみす

入道の又田せ本わき換ト行つまう

わ風と花のほんせよ也

拂もあわいしるよくいわてんくわ

ね志集

すのあ門禁のすとつをえりうへれ

すのあ門禁のすとつをえりうへれ

さうめうとよ、今葉も君のまのま  
とてうふれ勝況なうへやうも

ゆくらきつまきをうこのま

をりつまといまのわやうのま

一ノ山の山

うき鳥の山とある星の山とて云ひやうす有る  
うき鳥の柏木の山と云ふ山の山の山の山

の山

も山との山と山と山と山と山と山と山と山と山

シ番の山と山と山と山と山と山と山と山と山と山

みと山と山と山と山と山と山と山と山と山と山

わざれと山と山と山と山と山と山と山と山と山と山

一ノ山

柏木の山と山と山と山と山と山と山と山と山と山

と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山

越山

一ノ山の山と山の山と山と山と山と山と山と山と山

との山と山

院の山と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山

朱雀院の山と山と山と山と山と山と山と山と山と山

院と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山

タマリの山と山と山と山と山と山と山と山と山と山

山の山と山と山と山と山と山と山と山と山と山と山

毛根うへよかずかすもやと

御息所ミヤストコロの朝也

あけくらめゆかとひそむてゆき先

ク室の羽衣アマハフみとくまくせむに官

平いせそもとをほどのは

毛根うらくはうかひじとくれまく

やまくと

女ニえはまくわゆの折アマハフアマハフ

くふきり

ほのととゆかがまのり行つと

毛根ミヤスのじまうと

とひくまくゆうとくれんをひまなまく

とひくまくゆうとくれんをひまなまく

タモリの想え离サワガニといふくゆくゆの想

うとひくまくゆうとくれんをひまなまく

とひくまくゆうとくれんをひまなまく

とくまくゆうとくれんをひまなまく

ゆくと

あてつまきりつゝ

想夫寃の女ノ思ふ事ハシテキ

曲ヤ

おも出づるをソラ雨うと今さらすまきどきち

アキラミのうみゆうとひそつとぞも想

夫寃といきおもむき

まこととくとくとくとく

サニヌ和琴といきとおまきのとく

あとのうつまほつまほつま

おれを心からきくとおまくやまやうみ

サニヌのゆうな別さのもの

ゆうかにとととかくらぬ

も

ゆうき人かしてうきひきはくへ斗ふ

あわ

れと想夫寃の事

ひのとくやとくやもし

故郷の昔のあくこくうるく事

とくすり

おじいさんとおじいさんとくじいを

くわん

今すまきゆと女ニえりて  
はうはうとすなりの  
アハリクシテトスモキテ  
アリ  
霧乃辯

津をくわやおほきくもす  
モカヒカラセアツトモモリ  
ホリクシテアキキモツモ  
キテ

向秀過山陽田居思愁康因障人吹

萬作思旧賦

あらうとまくすり色面もわれよみ  
たまうと  
ももまくら富もくらんわるれ  
りむと  
やくらぬとくらんとくらん  
山前のもと御息の音よつてあ  
もととくらんとくらんとくらん  
とくらんとくらんとくらんとくらん  
とくらんとくらんとくらんとくらん

そいそもゆゑ也

病氣行きじとて宿す下の物よりわしのあらむ  
虫のよふ事の称といひて之を八雲内抄とす

いき行く

文選箇賦云蜂聚蟻同衆音猥積

國史云仁明天皇承和元年正月辛未内宴  
於仁壽殿是夕初授正六位上大戶首清上  
給從立位下清上能吹橫笛故預此恩賓

今案横笛二字出之久くもるは横笛

乃稱其名稱とぞゆゑ也

むづくのよふ事とぞゆゑ也

あやの世事とぞゆゑもあらむに  
きりの事いとぞゆゑもあらむに思ひゆ  
すやき事とぞゆゑもあらむに思ひゆ  
すやき事とぞゆゑもあらむに思ひゆ  
ふ事うれやうりあひ行つてもうや  
もうこもとくきて人ありハまわ  
ゆとぞゆゑ本へ

第廿四章  
竹林の風かまのせうどく稱よゑ

お門省東乃うちよゆをくうすくあひよ、  
みくらけまと女ニえどもしう  
なよてのんや

順和名呪咄小兒口哺乳冷想不調所  
詠や 今棄小兒の乳とあります

佛ノ道ノむじよしと金刀と木車と

いあ

康保四年七月村上天皇六七垂忌小野宮  
修詠誦草云有龍笛蓋希代之名物也

位詠誦草云有龍笛蓋希代之名物也

三官ありりあく中小ううてるううと  
こえら文事くサ御りぬうにせうと

わうぐくわくわせと

あうへ入道まの脚くとまわゆ西の  
あういゆ

あうへニ三の若志と却けりよナーフム  
あういゆ

山名もりの幸へ入道のの方よ  
二宮とわういゆ

とくにやうやくおわづかとまつりて  
おののこえをひたまくせんじてまいか  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

院も御宿すててゆくれうきぬわいみ

とくとく

是の院も又入きえのゆくわづかとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あきこよけの半えのこえりて  
奉こ女ふえのこえ

大将げきとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ニわのうべーのまうとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

蒙古文

柏木の日つまびらかと云ふ

わくわくするの幸い

是の源氏より夕方の一室へまよひの本  
うやうやしくてよし。今まば想史あくまづ  
きつまほにまもとくわゆるにわくや  
いと源氏の批判にあくまほをい  
りあつまつまつまの用意わづてこ  
う相應せやとの

ほのまの御を  
まわる

アフカリ  
つまもリタニ霧ノアシテテキモ  
ノヤ御武志人ノ上ノ事ヘリトム  
思フムモ御方ノ事ハ事ハリムアム

卷之三

かみ  
くまもとゆあはのうえんき

上人初見の心事  
かくまつたるをもてての行方  
いきゆきのりあはれ  
ひみ  
おは

ソラリ

ソラリキツツムヒテウシテムアラクマツモ  
ソラリムクのヌムルカトキニ行フ

ソラリムツアツトムトムタニキニキニ  
ソラリムツアツトムトムタニキニキニ

ソラリムツアツトムトムタニキニキニ  
ソラリムツアツトムトムタニキニキニ

ソラリムツアツトムトムタニキニキニ  
ソラリムツアツトムトムタニキニキニ

ソラリムツアツトムトムタニキニキニ  
ソラリムツアツトムトムタニキニキニ

ソラリムツアツトムトムタニキニキニ  
ソラリムツアツトムトムタニキニキニ

ヌムルカトキニ

南宮式部<sup>シキバ</sup>・貞保親王<sup>ミタマヤミミコ</sup>・苗達者<sup>ミタマヤヤイワ</sup>・清和<sup>セイワ</sup>  
御子母潔殿<sup>ミタマヤシタサキ</sup>・陽成院<sup>ヨウジンイエン</sup>の御子<sup>シト</sup>・  
上の文式アツミアリ・アレアツムシテアリ・アレアツムシテアリ・アレ

アレアツムシテアリとの事<sup>アリ</sup>

アレアツムシテアリと、  
アレアツムシテアリと、

アレアツムシテアリと、

アレアツムシテアリと、

まほりはうきうわに

まほりはうきうわに思ひよむかよよだれ

まほりはうきうわに

タキリのまほりはうきうわに や

タキリのまほりはうきうわに や  
タキリのまほりはうきうわに や  
タキリのまほりはうきうわに や  
タキリのまほりはうきうわに や

タキリのまほりはうきうわに

タキリ

タキリのまほりはうきうわに

そひほどのまほりはうきうわに  
そひほどのまほりはうきうわに  
そひほどのまほりはうきうわに  
そひほどのまほりはうきうわに

そひほどのまほりはうきうわに  
そひほどのまほりはうきうわに  
そひほどのまほりはうきうわに  
そひほどのまほりはうきうわに

そひほどのまほりはうきうわに  
そひほどのまほりはうきうわに  
そひほどのまほりはうきうわに  
そひほどのまほりはうきうわに

並 鈴出

以詞并祝為也名源氏君立十歲極而ノ次  
ノクセ堅志並え

ものみちやうのくもとひきくかくあけく  
うのくはものまくともとまくまく  
小帳ノミテんのくじりとらすくらる  
乃モナ法天男奈羅とかげられきて  
は僕の弟也

百ふえうとたま繪ア

百ふり人のミテとくにすわゆりとわ利え

うも薰衣香のむき

あき併けしのがよそみくわくく  
あつうすむりく

觀經云無量壽佛住空中觀世音大勢至是二  
大士侍立左右ミニ二大士ハ脇侍也

うらのらゆいぬう御てづくせぬく

天曆九年正月四日村上天皇為母后被供  
養宸筆法華經有八誦

ほけのむくちやうのくすみれき

御帳臺のうゆイ佛と御く御乃机を

きく下にゆ自條の説みがあやりこ  
下の詞よるまゝとゆつわぬまへ併の山あ  
けひとわう帳庵カツタケト佛殿ボダト寺蓋シテし  
らうくらが明也

うちわと山のふとをきく坐てみねは役  
ともあり

御宿ジエキヤウの便イニ内裏ノイリもんじもととおもむ  
おづくまよオヅクマヨ前マサニ行ムハラフなうとて  
各僧ゾクソウとも仰布ヨウブ施捧物セイボウモツアリラフテ  
をひきまくらをもあきアキまつてとまき

僧とをぬけりとより初ハタハタつてソクアキと

院のみよこの山のうづのや

塊カベの山サンのみよのまくらマクラぬん  
のまくらをまよにアガフニキアガフニキ  
ルマクマクマクマクいき

まじうんまくらマクマクと中宮チウゴウまくらマクラま  
とむくつとよとまくらマクラまくらマクラ

秋アキ中宮チウゴウまくらマクラ

かくまくらマクラとまくらマクラとまくらマクラとまくらマクラ秋アキの秋アキ

おまへもよひをとうほくと是あからうり  
とくの源氏の御文

かとまわゆりとまふはくしの御をうやむ  
そしやえりぬきうまわやうりと  
いふじせともあらゆる

きのやうこちわくうめりといふ

秋ぬ中えの御すくらのゆそふ  
うねもて、中えの山を養へ

あよびやけぬそまうわうの

是いほのウ翁

やとあの山をくまうめくしん

そに中えの山をくすく

たあま今ねあうぬのつみうるぬまよ

れやえのほは申ぬ翁とのう

うあうせのう

おとひもだいのくわ

ゆがのまく御み養へ

まくらんゆうきひマの力そたり

目連うそ六通とくろとびけよら

まとうと佛に観とすむきりや

其の母の餓鬼道カナダを救度スライドす

孟蘭盆經ウラボシキに

おうちのひくわどり一拂ハタツキ、  
六衆ロクジウの和ハれてうづくハシタメ時上達部ハバふ  
とむトム供ハサフはてハテテうり

まも條情マモチヨウアサニ

タモ

ルリ

セニ タモ

等ハナシる毫ハサス石祠イシノミヤとわれ此處の  
卷スミ八月ハチガツの奉ハサフよしヨシけ毫ハサス

八月ハチガツより冬ヒマツまでの奉ハサフみミ利

須スミ立タケル國クニこ

をのとよよ山里サンリとまつよわう清シラフす

けぬ端ハナタのむちムチあよのアヨノの不ハスの  
かくちカクチ山サンよりよまヨマすスりく  
山サンよりけくケクあらアラれレ山城サンショウ

國シヒサトよ小野里シオノリとひ不二フジツあり宇治郡ウチノコソリよ小野  
里シオノリ又シタも岩郡イワノコソリよ小野里シオノリあり小野  
豪宕カオタクの名前ミメノこむしの山ヤマよのすりと  
ありのトツ不ハシ利

ねニツのトツ不ハシ利

松塔ニツヨサキそひえの山ヤマの極ヒタチとひ不ハシ利

あるほ

もととあきらめてゆくする人ヒトをゆ

みかわせミカワセと

不折ヒツクてヒツク人ヒトのヒトとヒトや

うつ圓ヒツケンにゆきあはるヒツケンにゆきあはる

竹チクと

そろひまひ御祖

かくまきゆかやまとめよより

えいひシ寧ヒツキのを養ヒツクものとひりヒリゆ

うけまぬヒツクとひまひゆ

アム

小右記コウジ云寛仁二年十一月廿五日被奉ヒテマツル一寄ヒヨウ  
賀歲ヤモ上元カミニモニ下トトロ事可定申ヒサシナフ之栗クルスノ柄ハラ野ノ

小野二郷上下社司各申但昨日下社司  
久清進解文可尋旧記皇御神初矢津  
給小野郷大原沛蔭山也亦栗栖野  
可爲下社え山有株桂麥山之由先年給  
官府仍件小野并栗栖野可爲下社領者  
令作淨座而蔭山之記文可進之由作廊  
申云康保二年秋宜燒亡次燒失者又  
令仰云古人所傳不然文記文如件解文  
并事麵又上下社司申旨亦初秋奉沛封  
於上下御社え時上而社十四户下沛社  
十户又神戸數有增減上沛社七十余戸  
下れ社立十余戸此間可奉一定文除神  
山稼麥山之外山者不可奉寄歟奉山寄  
任勢太神宮之郡格云官物舍之類又右  
近馬場氷室堤河羣多池不可爲奉寄凡  
件案内者以丸年經賴令申前大府  
初知給之事也仍請廻分經賴未陳座傳  
前大府令云下社司進申丈先所椎又不  
進旧記但至栗栖野郷有稼下社麥之山上  
爲下社分可有便宜至小野郷可爲上沛

社分至丁山不可不寄非官物官舍之類  
也可奉寄賀茂上下社鄉之事上社賀茂

鄉小野・錦部・下社栗栖野・蓼倉鄉

上栗栖野鄉出雲

今棄山城安宿郡之内小野・上坂兵領  
也栗栖野・下社經寛仁二年十一月  
廿四日陳定右判て官寄とあむれひす  
けゆ緒りくらとの御もうちらんせ  
ソシケ所と又宇治郡より栗栖野わ  
アミシとすりあす

あくまうとみうるめかに

御消息はよ人のよ

伊とくもくもくしきぬまれ

ナガシテモノ

いふつひげまうとわがよ

えれ秋のよや漫とそしと活ほづく  
タナリの世内アマムロのうわ

くのうすとわるアキムキムク  
うけうくの御アリ侍きいだつひり  
ふ車うとくのうきり

まくわ  
うまくい  
きわ  
みわ  
くわ  
くわ

ムルカニ  
モハシテ  
モウカニ  
モハシテ  
モウカニ

# あまみの里

相木ノ志之

御名のうちゆをかんに伝わるるもと

まわゆる事より多くて未だ  
利くよあじとシタまうの小のくも柏木  
の連枝などつゝ

乃事次へ見えぬせぬ

寝  
ノ事よ衣のまき  
モれゆひのうもわぬも  
心  
心ひいたくふせ

六條丸の東の水みず 小まづてぬれ

國朝之書，多以漢文寫之。其後有以蒙古文寫者，則稱爲蒙古文書。

か  
か  
ア  
マ  
ル  
ク  
シ

卷之三

モニヨウツモソレアツカシ

セニミのトガリアツマツモセアシ

ハルムクモアツムシムサケアツイタス

タモリの浦みの羽とツモ

アツムアツムアツムアツムアツムアツム

アツムアツムアツムアツムアツムアツム

ミタクミ

セニミトヤセ

アツムガツモヤツム

アツムタナガの葉障

アツムアツムアツムアツムアツムアツム

ミタクミ

アツムタナガの葉障

アツムタナガの葉障

セニミ

アツムタナガの葉障

アツムタナガの葉障

アツムタナガの葉障

一  
まくらんよし

えしにきの御み事へもく事  
とくもあとうへるうをせん  
きくらむやうにとくおほりんと  
人ちよくうりしわくえくがひよ  
なうりうきと御基不ら爲くら  
一  
まくらんよし

あままき御み事へもくとせりあくい  
て、う

えしにきのえの申す

とくもあとれどもとて御み事へるふ  
みくもあくやあくさきわむけく先  
さきけふ

御息はのけえとて御み事へるふ  
きりもあとつりよけりとくよ  
いもけりとあこへとありひそ  
まくらり

くわくらぬくふくゆりとくやう  
竹の音くやいのまと古かくあ  
あれ丈婦くらまくよあへら

よわふかす別<sup>ハテ</sup>宿あつて

あじあき人の御ぬうりまことか

サニヌの幸<sup>ハ</sup>

かくかく御<sup>ミサス</sup>きま<sup>ミサス</sup>あけ

四<sup>ミサス</sup>息<sup>ミサス</sup>乃<sup>ミサス</sup>夜<sup>ミサス</sup>よ一<sup>ミサス</sup>夜<sup>ミサス</sup>のやまとを

まんとあは幸<sup>ハ</sup>

あづまとあづまとて

かじ日<sup>ミサス</sup>とあづま

九<sup>ミサス</sup>坎<sup>カニ</sup>日<sup>ミサス</sup>不<sup>ミサス</sup>も行<sup>ミサス</sup>えれ流<sup>ミサス</sup>幸<sup>ハ</sup>懃<sup>ハタク</sup>日<sup>ミサス</sup>

ひと東<sup>ミサス</sup>の西<sup>ミサス</sup>ひとも西<sup>ミサス</sup>わとあり

えむりとやうけとまくとみの風<sup>ミサス</sup>打<sup>ミサス</sup>ま

今葉<sup>ミサス</sup>四<sup>ミサス</sup>息<sup>ミサス</sup>のすと一<sup>ミサス</sup>夜<sup>ミサス</sup>宵<sup>ミサス</sup>とうりあん

の羽<sup>ミサス</sup>りいもてとア一<sup>ミサス</sup>夜<sup>ミサス</sup>のとくとくわやこ

りとア<sup>ミサス</sup>あつね<sup>ミサス</sup>まくとくとくまやこ

ひとおどりとすにあわゆ<sup>ミサス</sup>

あくまくじま<sup>ミサス</sup>とくとくせんとく

移<sup>ミサス</sup>の海<sup>ミサス</sup>の隨<sup>ミサス</sup>方<sup>ミサス</sup>のがる馬<sup>ミサス</sup>よとくちの隨<sup>ミサス</sup>

かとうけよとく

北<sup>ミサス</sup>より<sup>ミサス</sup>そとあり<sup>ミサス</sup>わ<sup>ミサス</sup>き<sup>ミサス</sup>こ<sup>ミサス</sup>

ちやうゆをゆいゆをゆけしわ

一ノ

是ハ女ニヌト相ホリシニシテ事  
トヨリ院ニ朱雀院ちかくの仕の大  
戸とひがり

御子テモニシテモアリシム  
柏木トモヤシレシキ  
ニヨウシム本多主のくとゆる  
シテのまとて

木ほくらニシテナカニシテ  
あそびと

御息石のうわの西半ゆくよしむみ  
シテシテシテナカニシテナカニシテ  
わをけき幸イリタシテ

ちりをさきにさりの事と  
おやじをさきにさりの事と  
あらまとさきにさりの事と

われとさきにさりの事と  
ま井のうこうやとさきにせうまんと  
あらまとさきにさりの事と

ソヨゴトウヤモモウタウハ消アリテシキモアリテソノ事モ  
ソモハニテナリテアリテソノ事モ  
ソモハニテナリテアリテソノ事モ

まわせの幸

室井のものれふ  
ゆゑありのま  
りのぬくと  
きりすあけ  
むらさきりあ  
たるみくわす  
タまうのよとの  
もじへま

やまと井のねうら

はよあゆま  
つうわてやんこあく

卷之三

おのよみに思ひてみやうとあら  
えりゆかねのゑひくはりまくら  
タタキの沖ナガリのむら  
をみ是ミヤスのうけいわせ  
事トコトコ

六事院のアラム  
モロコシハシマ  
サカナ

そと雪井てうのつり思清すまこ家  
れのひうじんあらそひよひいわひ  
行くわゆきとよとよとよとよとよと  
タまうのほてせしとそもわけい  
けくわのりとよわくちよとよとよと  
うとよとよとよとよとよとよとよと  
あやめやうやう物ヤマレキス  
今あうくてもうかやきよや  
しきりききたよと

えよりおうきよやういぬよと

うやのせう そくそくけうのあう  
じくじくとよわくをく川  
くと瀧のあ水のあわくにきくわ  
て 今案あう川の川の因よも  
あを瀧く小野山アリカウヤトと  
川と小野山ちにとどとと  
跡のまよ

ひくひくよんきと

うち中の朝ととくにゆるあいえり

御幸

みずいとてうりと

みまはるとひと

朝あらわす山の風やきの風

宮の山あいり

昨日またうわにとせりあめの木

山すくいとせり

みをせらむと柏木の木

さくら木

アミハシヤカツんじう、も木れ

りの

タ露の木事へやことの木す、二木よ

あねトヤカツ

うみてこくにりじかにうけのだけわ

る木れ

人のうてこくにうけの木の木

きあくせかくとく

木の木きも木の木の木

きあくせかくとく

の木の木きも木の木

の木の木

の

ゆりうるふあい女房よりつま

うきとまくわへもせおとく

脇者アラシヤのりとあくはる深コトコツうてすれら

てんきとうにゆく

うら玉のようちのまうし

一束えりうすと浦ウラヒのよ、鳥トリよ

一羽そよぐとあひてこいつて

玉のみどり

ますふとがくとおのけまくらむま

よゐ

れいかわの志の初ハタハタの今ハタハタをも

せんのまよとまく

うこううにねく一束ヒトドリもせ

あみてうらうとく

むくむくとくまく

そぞくきまくいのくのくせと

是シテたあまのくりゆすと

さあじつゆく、みのくらとくもよ／＼失ミスか

セリ

二三

おのうのとく

おのうのとく

シテのとく

きのとく

シテ

そい雪井の和の事

おのうのとく

アモのとく

トモウタス

セミトク

ヒタチにね

セニムツタリ

テツケル

トモウタス

シテのとく

ヒトツイシムル

カのとく

蒙古文

يَسِّرْ لِكَ مُؤْمِنْ

ホノマキ  
の木石のぬ  
羽まくらのゆ

繫城

セシムアリテモハシナ  
リ

女の心事と女所  
のやうのうき  
うきのうきのうき  
大歎のゆく  
ゆくゆくゆく

玄叶のえぢく御

弘徽殿女御の事

らまくやまとをかくすとわづれをうそ  
たけのちのうえあはれ思ふてれあはれの  
こみと思ふふくらうとくらうとくらう  
のうりあひゆきまけゆとゆ

卷之三

惟先ひとちりタ房のうへんかの来よみ

内侍のとけりをす井のき今もまも  
井のあめあめうりゆくよると

廿四 御法

以秋の春石源氏立十歲のまとう秋とれ  
すみもも紫とこの秋をまう  
ぬうちあまくす黒のぼくのぼくとす  
わまくはねあられとつねとあ  
くとあくへそりあくつあく  
花宴すりきりあくもあくとあく  
ぬくわきづくとあくとあく  
すくとあくとあくとあく

うのまへあきらめりんとよひ一かまを  
りうちのすうりうらうれしやまを  
まあとありらぬりくわう

あんさんのゆせりうこち

峰巣とい寝あひうにふとおりう  
一妻戸うてあんの調度

不思議

みる人のまけまわのえくきと

醜アクミアリキアムセトドヤ  
きてえきの時。つもあわせしたうれ

だらう里あーのうへすとソア

中まこの魂アリモテ活

明石中

アヤシノキアゲ  
ニ二条院了行啓

東ノ村むすすをくわくまにくま  
つまきくら

ニ二条院の東村と中宮の山林アヤシ  
宿泊ようてあいづくり中門も潜  
ありありと寝殿也紫とのまみ

おとこ

あたへんかくはまゆ  
も

タリ  
名湯、山中よりあり行啓へ先寝ありて風  
にありゆるよとくいづんよ傳ひの所

中まの匂氣の爲ひ度  
敵ノ事も出來也  
御讀物よりて多く之佛

城御キヤウ  
とく東トクドウの村ムラ  
さかえて委ミり後トツ  
むの手ハ引ヨリこし

至  
而  
之  
也  
可  
以  
不  
已

卷之三

۳۷

一日一夜脊戒とねよより本番専一日  
セイカイ クモア  
マニタ カイ  
ウラニヤラライ サニ  
チウハ

中行中根人一目齊  
散廳金蓮

行  
カ  
シヨヌ  
コ  
レニ  
育  
取  
廻  
金蓮

「ハシマリトモヒタチニシテ  
ミスル」

野  
山  
中  
之  
事  
也

もとすよめあるてのふれり  
まちあけ

蒙古文

そへゆくの意の事

蒙古文

蒙古文

とうゆくおひのふきぬありてん乃  
御ノ者ちねあんぐるよりそ  
祀とれりちわのまわけれら  
うじゆくもりうきよみくすゆ  
りみくわん人わのりはのく  
くやつれりせまのつむそ  
正行すとおやけり

すこのゆひ一より、よまと  
あ、にて

毒ニホニ月服服フイトサ日

かぎりをとじあらぬのゆふとくううう  
はまよたまよはまくまくはまほの石え  
祐とこのくすり、れりましれりふ  
野のすきとをわくさうりの  
くとつとくとくとくとくとくとくとくとく  
黒アマゲアヒケトトリウマリ  
わらわの山とくらべし

唐氏の山と

のむはまかめうまよもそのあがれと

のうりうやまけとせうのまことうら  
くふくと雪よのうとよと秋とわきそな  
こううかくくに咲ぬ中まのひとうれ  
かくくくくくくくくくくくくく  
きくもと秋の時うれつアトヤマツと  
あくもじせつわんじゆう咲とす  
ゆききとまほすあむとひぬ  
ろくせんじやうわく

